

# 二〇二二年度 入学試験問題 帰国生

## 国 語

### 【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

# 1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

コンピュータや情報通信技術の革新によって、私たちが利用できる情報の量も膨大なものになりました。向こうから勝手に流入してくるような情報も飛躍的に増大しています。私たちの頭の中に、いったいどの情報をどう保存し、どう整理して、必要な時にどう呼び出せばいいのか。この情報の洪水を処理する能力の軸となるのは、やはり国語力でしょう。私たちの脳の能力が、コンピュータやIT機器と同じペースで進化できているとはとても思えない中、大量の情報におぼれないためにはどうすればいいのでしょうか。

また国際化というものも、この問題をさらに難しくしているようです。先ほどの治験審査委員会でも、国際共同治験というものがかなりあります。世界中で同時に同じ条件で、さまざまな人種を対象とした臨床試験をします。人種によって薬の効き方、副作用などが異なる可能性があるからです。そうした場合、科学研究の正しさを保証するため、またトラブルを避けるために、説明文書はさらに厳密になります。その結果として、日本人が日本人を相手に作成する文書であれば考えられないような形式や文言が含まれることがあるのです。とくに、製薬会社が海外の企業である場合、文書はもちろん日本語に訳されていますが、不自然な部分や実際にそぐわない部分が目につきます。でも、それを勝手に削ったり変えたりすることは、許されません。世界とつきあっていくということの、絵空事ではない難しさのようなものが見えてきます。「ツートン言えばカー」という身にも心にも慣れ親しんだ母語のコミュニケーションが、どうしても通用しない場面が、国際化社会では起きてくるわけです。

「国語力」というのは、最初に書いたとおり、母語であるからこそ空気のような存在で、一種の油断、余裕のようなものがあり、それが温かさにも通じていたりしますが、一方で、おろそかにされがちです（面白いもので、母語へのこうした「タイド」は、そのまま母親に対するそれと通じるものがあると思いませんか）。

A 国語力が重視される場面もありますが、それは、学校の成績や入試の点数、プレゼンでアピールできる話し方、クイズに出るような難しい漢字や語彙の知識、といった部分に限られているようです。けれども、いま挙げたような、<sup>(1)</sup>国語力をほんとうに頼りにしたい真剣な局面というもの

30

25

20

15

10

5

を、忘れるわけにはいかないはずですが。

国語力は大事です。誰にとっても、一生、大事です。

私たちのことばの現実はどうなんでしょうか。

ことばというものを、多くの人は極端な省エネモードで使っています。B こんなふうです。

・ぱつと思いついた常識的な、通りの良さそうなことばで間に合わせる。いつもそれを繰り返しているの、ほとんど自動的、ハンシヤ的にことばを使っている状態。

・自分の内心の深いところ、考えの微妙な部分とはあまり関わりなく、するつと滑らかに送り出せばいいという姿勢。

・ことばの選択に多少の違和感があっても気にせず、とりあえず、なんとなく、使えれば十分。というよりは、ことばに違和感を持つこともあまりない。

・汎用性の広い便利なことばを繰り返し使っている。「すごい」「やばい」「無理」等。

・仲間内で簡単に共感できる短い表現をもつばら愛用する（仲間と思っていない人とはあまりかかわらない）。

・本離れが加速し、長い文章を読む機会が減っている。

・周囲と摩擦を起こさず、期待にうまく添ってことばを使っていこうとする。

省エネモードと書きましたが、日本人は最後に挙げた「周囲と摩擦を起こさず、期待に添う」という点については、実は多くのエネルギーを割いているように見えます。自分自身に即してことばを使っているというよりは、他者との関係が優先されている。そこには、「思いやり」や「配慮」という美しい側面もありますが、その一方で、<sup>(2)</sup>ことばが自分から離れていくことを放置していることになりました。いきすぎた「忖度」で大事なことを見落とす可能性もあります。

こうした現状を見ると、ことばというものが「頼りになる武器」からはど遠くなっていることがわかります。

その一方で世の中では「学びの基本は国語」ということも言われています。その時、人は<sup>(3)</sup>国語という教科にいったいどう期待をしているのだろうと、私はいつもフシギに思います。テレビCMで、「基本は国語」

60

60

55

50

45

40

35

という音声と共に流れている画面は、幼い子がひらがなを何度も練習する姿だったりします。ひらがなを習い、漢字を習い、むずかしいことばで単文を作り、段落の要約を黒板からノートに書き写し、調べてきたことを発表し……、そういうことを続けていけば、着実に正確にことばの力を稼働させ、さまざまな学びを支える、というふうになるのでしょうか。過去、その方法は成功してきたでしょうか。

文部科学省は、詳細な学習指導要領を作成し、一歩一歩さまざまな力を育てる道筋を示していますし、日々日本中の教室で国語の授業は繰り返されています。努力も工夫もされています。C、どうも想定通りにはいかないようです。小学校高学年に入った頃、勉強の内容が複雑化したり、

抽象化したりして、徐々に日常の暮らしから離れていく時期に、ことばが内容を背負いきれない、複雑な思考を進めるためのことばの力を十分に持っていない、という子どもが出てきます。D それは、ドリルやテストをいくらやってもなかなか解決しません。

たぶん、最大の難問は、子どもたちが、勉強の場面で本気になってことばを使っていないという、がっかりするような現実だと思えます。

先年、私はNHKで長くラジオ体操の指導をしてきた西川佳克さんから、例のラジオ体操第一、第二を教えてもらうという体験をしました。ピアノ

ストの加藤由美子さんの生伴奏もついているという贅沢な指導です。プロならではの的確な指示で、動かす筋肉を意識し、一つ一つの動作を丁寧にしていきます。生演奏のピアノは、力の強弱、リズム、動きのめりはりを実にうまくリードしてくれました。それはまさに目の覚める体験で、「ラジオ体操操ってこんなだっけ？」と驚くようなものでした。第一、第二を終える頃には全身が熱くなり、汗が噴き出し、情けないことに翌朝は筋肉痛で参りました。本気でちゃんとラジオ体操をしたことが、今まで一度もなかったんだなあ、と痛感しました。なんとなく形だけなぞっていたに過ぎません。過去さんさんやってきたラジオ体操は、ほとんど無駄だったのだろうと思うと、我ながらおかしくなりました。

それと同じことです。本気になって、主体的にことばを使っていない子どもに、何を教えても、私の過去のラジオ体操みたいなもので、狙っているだけの効果を生まないでしょう。ラジオ体操も、勉強も、ちゃんと意識してやらないと無駄が多いというわけです。

子どもを主体的な姿にさせ、本気のことばを教室で引き出すことが、国

語力が育つための基本的な条件です。今だって十分本気だと「シユチヨウする子どももいるだろうけれども、いや、本当の本気はそんなものじゃない、主体的にことばで考えるところというのはこうすることなのだ、とリアルに、目の前の子どもに体験させること。そういう時にしか、国語力は本当には育たないはずだ。

もちろん簡単ではありませんが、肝心と言っているくらい大事な働きかけです。でも、それをするのが仕事だと、国語を教える人たちが覚悟していないのかもしれませんが。

(荻谷夏子「国語力」は大丈夫か)

★付度……他人の心中やその考えなどをおしはかること。

問一——(1)「国語力をほんとうに頼りにしたい真剣な局面」とありますが、どのような局面ですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問二——(2)「ことばが自分から離れていく」とありますが、どういうことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問三——(3)「国語という教科にいったいどういう期待をしているのだろう」とありますが、どのようなことを期待して、どのような結果になっているのでしょうか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国語は着実に正確にことばの力を稼働させ、さまざまな学びを支える力があると期待しているが、実際は、複雑な思考を進めるためのことばの力を育てられていない。

イ 国語は文章を要約したり、調べてきたことを発表したりしてコミュニケーションの力を身につけられると期待しているため、周囲の期待に添ってことばを使っている人が多くいる。

ウ 国語は「思いやり」や「配慮」を育む美しい側面を持つと期待しているため、実際にことばを使う場面では他者との関係が何よりも優先されている。

エ 国語は難しい漢字や語彙の知識を本気で学ぶことでことばの力を養えるものだと思われているが、現実にはリアルな体験をしていないので机上の空論に陥っている。

問四

——(4)「ラジオ体操第一、第二を教えてもらおうという体験をしました。」とありますが、ラジオ体操の例を出すことで筆者が説明しようとしたのはどのようなことですか。解答らんに四十字以内で説明しなさい。

問五

——(5)「本気になって、主体的にことばを使っていない」とありますが、なぜこのような姿勢になるのですか。解答らんに合うように本文中から八字で抜き出しなさい。

問六

A 〽 D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア もちろん    イ そして    ウ でも    エ たとえば

問七

——(ア)〽(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国際共同治験<sup>ちげん</sup>が広まり、その説明文書における日本語訳の表記は厳密さを重視しているため、日本語としてわかりやすいかどうかについては配慮が難しくなっている。

イ 現代人はことばを他者との関係構築のために使っており、仲間内で共感するためだけに「頼りになる武器」としてことばの力を磨<sup>みが</sup>いている。

ウ 文部科学省と学校現場が一体となって、ことばの力を稼働させるための学びの工夫<sup>くふう</sup>を続けているものの、家庭環境<sup>かんきやう</sup>によって省エネモードでことばを使う子どもたちが増えている。

エ ドリルやテストが将来役に立つように、一見無駄<sup>むだ</sup>に思えることが思わぬことばの力を引き出す可能性がある。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「ぼく」の一家は、「ぼく」が小学六年生の頃、妹つぐみの持病のために、埼玉県から山梨県に移り住む。その後中学生になり、埼玉時代の親友、直登から塾の夏期コースにさそわれた「ぼく」は、同じ中学に通う山梨育ちの結衣と共に参加することにする。

午後、新宿駅に降り立ったとき、ぼくは一瞬、呼吸ができないうような気がした。呼吸はしていたんだろうけど、酸素が体にまわらないみたいだった。

★浦和に住んでいたころは、もちろん数えきれないくらい東京に足を運んだ。新宿も渋谷も原宿も、大まかな地図は頭に入っている。なのに、まるでにがり水のカプセルに、すっぱり包まれてしまったような窮屈さをぼくは覚えた。

ハンカチで首の後ろの汗をぬぐいながら早足で通りすぎるサラリーマンたちや、肩の出たカラフルなブラウスを着た女子のグループ、黙ったままスマホの画面に指をすべらす少年たち。世界は、ぼくが毎日をすごしてきた世界とはちがう。空気はぼくが毎日吸っていた空気じゃない。太陽の光はぼくが浴びていた光じゃないし、さがさなければ地面に土すらない。

「わあ、人がいっぱいだあ」  
結衣は駅の人ごみをめざらしそうに観察しながら、「ぼく」と感心したような、ほうけたような声をあげた。

この空気にだってきつとすぐまた慣れるだろうと思いなおし、ぼくは乗りにかえる電車まで結衣の前を歩いていった。

電車の中の吊り広告や液晶画面を見まわして、結衣がまばたきをくり返した。

(2) 「私たちが完璧におのほりさんだね」

浦和駅の改札で直登が待っていた。相変わらず、能天気な、「おつかれちゃーん」

と目じりを下げて、結衣の荷物を手にとった。まず、結衣が予約していた駅前のビジネスホテルにチェックインして、それからバスで直登の家に向かった。直登の家もマンションの一室だが、ぼくが住んでいたマンション

より大きくてきれいだ。直登は一人っ子なので、ぼくの部屋よりずいぶん広い部屋をあてがわれているし、十五階なので、見晴らしもいい。ぼくのために、直登の部屋にはお客さん用の簡易ベッドがすでに置かれていた。新しいモデルの静かなエアコンは、部屋を快適な温度に保ってくれる。バスルームは、南アルプスの家の風呂場とちがって高級ホテルみたいにゆったりした浴槽があり、マッサージ機能つきシャワーから出るお湯はいつでも適温。到着したばかりのぼくに、直登のかあさんがニコニコ顔で、

「越ちゃんポテトチップスが大好きだったよねえ」

と、大皿に山盛りのポテトチップスとコーラの大きなペットボトルを出してくれた。

「結衣ちゃんも、山登りのときはありがたう。直登から聞いたわ。頼もしいわねえ。今日の夕飯はみんなで焼き肉にしようね」

「はい。ありがとうございます」

結衣が快活そうな返事をする、直登のかあさんはまたニッコリ笑った。毎晩煮魚のおかずというののがいやだったわけではないけれど、久しぶりの焼き肉はやっぱうれしい。

「私は、越ちゃんママみたいにお料理が得意じゃないから、ホットプレートで焼く焼き肉がいちばん簡単でいいわ」

どーんと大皿に牛肉をタレにつけて食べるごはんは、相当久しぶりで、いくらでも食べられた。食べすぎて、結衣を駅前のホテルまで送るあいだ、苦しくなって何度も立ち止まった。

翌日から夏期コースがはじまった。小学生のころお世話になった講師の先生たちもなつかしかったし、受講生にも見知った顔がいくつもあった。

「こういうコースを受講するのははじめてだから、なんだか緊張しちゃうなあ」

初日の朝にそういていた結衣は、講義がはじまると、難問をすいすい解いてほめられっぱなしだったけど、ぼくは、なんだか頭がぼんやりして先生に、

「なんだ、越。山梨に行ってもちゃんと勉強しますっていつてたくせに、こんな問題も解けんのか」

と、あきれられてしまった。草とりはうまくなったけど、**A** 勉強はあまりしていないから仕方がない。きつと結衣は、ほとんどの生徒が有名大学に入れるような高校へ進むだろう。でも、ぼくはまだ、進路も将来し

たい仕事も決まっていらない。

「中学生になったばかりで、就きたい仕事が決まってる子なんて、そんなにいいわよ」

かあさんは笑ってたけど、考古学者になりたいという目標にむかって邁進している結衣が、なんだかうらやましかった。直登は、

「フツターのサラリーマンでいいじゃん。とりあえず、できるだけいい高校に行けばいいだけの話でしょ」

**B** 能天気。あせりなんてまったくないみたいで、それもまたそれで、うらやましい気もした。それでも、何かになりたいほどいたほうがいいのかな、と考えはじめていた。夢って、かなうかどうかはべつとして、結衣みたいに、持っているほうがいいのかもしれない。(3) そういう話を、とうさんやかあさんと、真剣に話し合ったことはないし、二人ともつぐみの病気のことで大変そう、ぼくのことでも大変な思いをさせられないと、心のどこかで思ってた気がもする。

講師の先生がいうように、レベルの高い高校へ入れば、それだけ選べる職業も増えると考えるべきだろうか。塾にいと、だんだんそれが普通で、ぼくは人生のレールから外れてきているんじゃないだろうか、と思えてくる。

結衣は毎日、生き生きと勉強を進めていた。直登も結衣の熱心さに影響されて、結衣を「結衣先生」と呼び、数学の問題の解き方を教わったりして、**C** マジメに受講していた。

ぼくだけがまだ、あずさ号を降りて新宿駅のホームに立ったときの違和感を引きずっていた。講義に身が入らないし、勉強に集中できなくて、自分で書いた字を消しゴムで消して、書いてまた消す。窓の外からかすかに聞こえてくる信号機のメロディーや、遠くから小さくひびいてくる電車の音が気になって、ちっとも成果が上がっていない気がした。

講義が終わったあと、ファミリーストランでハンバーグセットを食べながら窓の外をながめているときや、ゲームセンターに寄って三人でワイワイ楽しんだり、UFOキャッチャーでピカチュウの大きなぬいぐるみをゲットしたときも、自分が自分じゃないような、妙な感覚がずっと背中にはりついていた。

十日間のコースの真ん中で、一日休みがあった。七月三十日、結衣の希望もあって、デイズニールランドへ行くことは、前から計画していた。三人

とも、もちろんはじめてじゃなかったけど、大人の付き添いなしで行くのははじめてだった。

アトラクションをじゃんけんして選んだり、いろんな味のポップコーンを分け合ったり、たまにはあまり人気のない乗り物にのんびり乗ったりしているうちに、まあ、きつとなるようになる、もつと気楽にすごそうと思えるようになった。夕方、最後にジェットコースター型のアトラクションに乗った。そして、シートから立ち上がってポーチを受けとったとき、中のケータイがブルブル鳴っていることに気がついた。

あわててポーチからケータイを引っぱりだすと、かあさんからの電話だとわかった。電話の前にメッセージも届いている。

「至急連絡ください。つぐみが大変なの」

着信音が途絶えてしまったので、アトラクションの外に出て、折り返しかあさん呼びだした。

「あ、越。今どこ？」

「え。デイズニールランドだよ」

「そっか。楽しんでるとこ、ごめんね。あのね、つぐみがね、つぐみが、ママシにかまれた。あ、あのピコも。散歩中に。救急車で今病院に来たとこ」

(4) 「……うそ……」

これしか言葉にならなかった。

「越、悪いけど、これから帰ってこられる？ ピコも鼻先をかまれて顔が腫れていて、動物病院に連れていかないといけないから」

頭がくらくらした。すぐには考えがまとまらない。でも財布には、電車賃ぐらにはあるし、緊急事態なんだから、帰らなきゃ、という判断だけはついた。

「わ、わかった。とにかく今から乗れるいちばん早いあずさに乗るよ」

「お願いね。越も気をつけて帰るのよ」

電話を切って、直登と結衣に事態を説明した。

「荷物は宅配便で送るから、すぐ新宿に行かなきゃ」

直登が出口へむかって歩きだした。

「つぐみちゃん、大丈夫かな」

結衣も神妙な顔で、直登のあとを追った。

まだ半分混乱しながら、ぼくは、落ち着け、落ち着けと自分にいい聞かせ、

何もないのに何度かガクンとつまずきながらあとにつづいた。

「あの、結衣。ママシにかまれて死ぬことってあんのか？」

(5) 結衣なら知っているかもしれないと思った。

「うん。ごくわずかだけど、いる。体力のないお年寄りとか小さな子どもだと思っただけ」

「毒を持つ生きものに気をつけましょう」というポスターがたしか保健室のかべに貼られていた。(6) スズメバチのとなりに、だいたい色と黒のまだら模様(もよう)のママシの毒々しい写真があったな。あんなのかまれてたら、痛いんだらうな。

つぐみの容態(ようたい)が気になった。もちろん、ピコの具合も。

「あ、でも救急車ですぐに病院へ行ったなら、死ぬことはまずないと思うよ」

結衣はこうつけくわえた。

舞浜(まいはま)から新宿までの電車の中で、再度(さいど)かあさんにケータイからメッセージを送った。

「つぐみとピコの具合を教えてください」

かあさんからのメッセージは返ってこなかった。きつとバタバタしていて、それどころじゃないのだろう。

「気が気じゃないだろうけど、落ち着いて帰れよ。明日、塾の先生には事情(じよう)を説明しとくからな」

新宿から松本(まつもと)行きのあずさ号に間に合った。ホームの自動販売機(はんばいき)でミネラルウォーターを一本買って、自由席の車両に乗りこんだ。

(森島いずみ『ずっと見つめていた』)

★浦和(うらわ)：かつて埼玉県(さいたまけん)南部に存在した市。現在はさいたま市の一部である。

問一 — (1) 「まるでにがり水のカプセルに、すっぽり包まれてしまったよ

うな窮屈(きゆうくつ)さ」とありますが、これはどのような様子ですか。五十五字以内で説明しなさい。

問二

— (2) 「浦和(うらわ)駅の改札で直登(なおと)が待っていた。」とありますが、直登と結衣と「ぼく」の関係性としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三人は、この時以前から知り合いであり、「ぼく」と直登が浦和で、「ぼく」と結衣が山梨(やまなし)で知り合ったことから関係が始まった。

イ 三人は、この時が初対面であり、「ぼく」と直登、「ぼく」と結衣が知り合いだったことから、一緒に浦和の塾に通うことになった。

ウ 三人は、この時以前から知り合いであり、元々全員で浦和の同じ塾に通っていたことから関係が始まった。

エ 三人は、この時が初対面であるが、それ以前からメールで連絡を取り合っていたため、お互いにすっかり意気投合している。

問三

— (3) 「そういう話を、とうさんやかあさんと、真剣(まけん)に話し合ったことはないし、」とありますが、「ぼく」が両親と話し合ってみたくて考えている話の内容はどのようなことですか。「ぼく」の心情に注目して、三行以内で説明しなさい。

問四

— (4) 「『……うそ……』」とありますが、つぐみがママシにかまれた事故について聞かされた「ぼく」の様子としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 死に直結する可能性のあるつぐみの事故に恐怖を感じ、絶望的な気持ちになっている。

イ つぐみの事故を現実の出来事として受け止めることができず、母親が嘘をついていると疑っている。

ウ 突然入ってきたつぐみの事故の情報に気が動転し、すぐに考えをまとめることができなくなっている。

エ 事故によりつぐみの持病が悪化するのではないかと心配し、再移住のことを考えて混乱している。

問五

— (5) 「結衣なら知っているかもしれないと思った。」とありますが、これはなぜですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問六

——(6)「スズメバチ」とありますが、「虫」を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 飛んで火にいる夏の虫
- 二 一寸の虫にも五分のたましい
- 三 虫がすかない
- 四 虫が知らせる
- 五 虫がいい

【意味】

- ア 自分勝手に、ずうずうしいこと。
- イ なんとなく嫌な感じがして、相性が合わないこと。
- ウ 何も知らないで自ら危険や災難に進んで飛び込んでいくこと。
- エ はっきりした理由はないが、何かが起こりそうな気がする。
- オ 小さな小さいものでも、それ相応の意地や根性があるものだという。

問七

A ～ D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア いちおう
- イ いつになく
- ウ たしかに
- エ やっぱり

問八

本文に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実在する地名や名称、「七月三十日」などの具体的な日時を示すことで、登場人物の状況をより一層現実的に描くことに成功している。

イ つぐみの事故について知らされて以降、「電話の前にメッセージも届いている。」のように一文が短くなり、「ぼく」の切迫した状況が強調されている。

ウ 会話文では感情の起伏がわかりやすいように、「おつかれちゃーん」のようなくだけた表現や疑問符、感嘆符が効果的に使われている。

エ 「自分が自分じゃないような、妙な感覚」など、たびたび示される「ぼく」の感情表現は、「ぼく」が家族との関係に疑問を抱いていることの暗示になっている。







